

03

服をめぐる

衣服の研究現場より—京都服飾文化研究財団(KCFI)広報誌



対談

『ふる着をたずねて あたらし着を知る』

玉井健太郎(「アシードンクラウド」デザイナー)

服をめぐる 03

一人一品

玉井健太郎（「アシードンクラウド」デザイナー）

『ふる着をたずねてあたらし着を知る』

p3

地産街道をゆく③

市原（京都） p10

今日の補修室 第三回

時代マネキン p14

KCI Wunderkammer

紐付きの鉄製網 p15

PEOPLE

どうしても捨てられない
服飾品は何ですか？ p16

ファッション・デザイナー×

KCI 収蔵品

一人一品

ゲスト

玉井健太郎

Kentaro Tamai

著名人が各々の目を通し、KCIの収蔵品を語る「一人一品」。今回のゲストはファッション・デザイナー、玉井健太郎さんです。

玉井さんはロンドン芸術大学のセントラル・セント・マーティンズで服作りを学び、卒業後はマーガレット・ハウエルのアシスタント・デザイナーとして活躍しました。帰国後の2007年にデザイナー、山縣良和氏と「リトゥンアフターワーズ」を設立。2009年に「リトゥンアフターワーズ」から独立した後、自らのブランド「ASEDONCLOUD（アシードンクラウド）」を立ち上げました。

今から100年ほど前の働く人々が着ていた洋服が好きだと語る玉井さん。それは服の形と機能がうまく両立し、独得の美しさがあるからだと言います。その美学は玉井さんが作る服にも色濃く表れています。

そんな玉井さんがKCIの収蔵品から選んだ一品は、1900年代の女性用の乗馬服です。

本誌について

『服をめぐる』は、京都服飾文化研究財団(KCI)が収蔵する膨大な西洋服飾コレクションを手がかりに、服飾の歴史や文化を分かりやすくお伝えする小冊子です。文学者やアーティストからの視点、日本の伝統産業との関わり、研究現場からのレポートなど、さまざまな観点から服飾の世界にアプローチします。服をめぐる旅が今、ここから始まります。

京都服飾文化研究財団(KCI)とは

京都服飾文化研究財団(The Kyoto Costume Institute, 略称 KCI)は、西洋の服飾やそれにかかわる文献資料を収集・保存し、調査・研究する機関として、1978年に株式会社ワコールの出捐によって設立されました。現在、18世紀から現代までの衣装など服飾資料を約13,000点、文献資料を約20,000点収蔵。それらを多角的に調査・研究し、その結果を国内外での展覧会（「モードのジャポニスム」展、「身体への夢」展、「FUTURE BEAUTY：日本ファッションの30年」展など）や、研究誌（『DRESSSTUDY』、『Fashion Talks...』）の発行を通じて公開しています。Website <http://www.kci.or.jp/>



「ラグジュアリー ファッションの欲望」展（2009年
於：京都国立近代美術館）©The Kyoto Costume Institute,
photo by Naoya Hatakeyama

【対談】

ふる着をたずねて あたらし着を知る

玉井健太郎（「アシードンクラウド」デザイナー）× KCI



クリード
乗馬用スーツ
1900年代
京都服飾文化研究財団所蔵
畠山崇撮影

男性服の要素を取り入れた女性のための乗馬用スーツ。テラード・スーツで名高いイギリスのクリードは、18世紀より女性の乗馬用スーツを手掛けていた。19世紀以前、女性の乗馬は上流階級の伝統的な楽しみであったが、19世紀末になると一般女性の間にもスポーツが広がり、乗馬も楽しめるようになった。

KCI（以下K） 本日はKCIの収蔵品の中から玉井さんが選ばれた作品を手がかりに、服や服づくりについていろいろとお話をうかがいたいと思います。どうぞよろしく願います。

玉井（以下T） よろしく願います。

K 今回、玉井さんが選ばれた収蔵品は、今から百年ほど前に作られた女性用の乗馬服です。1900年代に「クリード」というメゾンで作られたものですが、「クリード」はご存じでしたか？

T 確か、イギリスのメゾンですよ？

K そうです。十八世紀初頭にロンドンで創業して、十九世紀半ばにはパリにも支店を出しました。この乗馬服が作られたころはコンコルド広場の北側に店を構えています。

T 一等地ですね。裕福なお客さんが注文したのでしょうか。

K 実物をご覧になっていかがですか？

T きれいですね。そしてかっこいい。かちつとした仕立てでよく出来ていると思います。あと、スカートの形がすごく面白いですね。非対称で一部が膨らんでいます。

K 現代と違って、この時代の女性が馬に乗るときは横乗りでした。スカートの一部を膨らませて仕立てているのは、横

乗りで曲げた膝をこの膨らんだ部分に納めるためです。さらにその時にスカート裾のラインが地面と平行になるよう、このようないびつな形のスカートにしているんです。

T それは馬に乗った時に一番きれいな姿になるためなんでしょうか。

K はい。騎乗時の姿を想定してデザインしていると思います。ヨーロッパでは、貴族のたしなみとして男女を問わず乗馬を楽しんでいました。十九世紀まで女性は馬に乗る時もスカートをはくのがマナーでしたが、それが1890年頃から少し緩くなってきた、ジョッパーズ（腰部はゆったりし、膝下から足首までは細いズボン）をはいても良いということになりました。しかし、それでも見た目はスカート姿でなければいけないので、このようなスカートが着用されたんです。ちなみに、このあと二十年もすると女性が馬に跨ることが許され、オーバースカートの姿を消します。

T なるほど、動きやすいジョッパーズをはきながらも、見た目はあくまでもスカート姿。慣習と機能性がせめぎ合っている感じでおもしろいですね。

K ところで、服作りの面から見ても、この乗馬服はどうお感じになりましたか？

T ジャケットのアームホルの形や角度が今とは違いますね。現代の服だともう少しゆとりをもったアームホールを作ります。そうじゃないと腕が回らなくて動きにくいからです。

K 確かに。この袖付けの窮屈さは十八世紀の男性用宮廷服とよく似ています。二十世紀に作られた服だけれども、それ以前の要素が見え隠れしているということでしょうか？

T そういう風に感じますね。それから女性用の服だけれども、メンズウェアのテクニクがしっかりと入っている印象です。

K そう言えば、玉井さんはロンドン芸術大学のセントラル・セント・マーティンズでメンズウェアの勉強をされたんですよ？

T そうです。2004年までセント・マーティンズで勉強して、卒業後はマーガレット・ハウエルでメンズウェアのアシスタント・デザイナーをしていました。

K そうすると、玉井さんはやはりメンズの仕立てにこだわりがあるのですか？

T それが、メンズならではの作り方やディテールについて細かく追及するタイプではなくて（笑）。メンズの要素を背景に置きつつ、それにいろいろ付け加えて

いくのが好きなんです。

●

K 普段から服の機能について考えておられると思いますが、デザインをする時も、そういうことには気を配ってらっしゃるんでしょうか。

T 僕は服をデザインする時、着る人を想定した物語をつくるんですけど、想像上の人物にとって必要なアイテムや機能を服にしのばせて、服に役割を持たせたりします。例えば眼鏡をかけている人を想定した時は、袖口に眼鏡拭きに使えるディアスキンを縫い込んだり、あるいは、普通のポケットとは別に、フラップのついたもう一つのポケットをサイドに付けて、着ている人が手をポケットに突っ込むと、後ろから手を入れた人と手で手をつなぐことができる服とか。それは親子を想定しています。

K 着る人には「そういうことができる服です」って伝えるんですか？

T それはいいですね。着た人が何か思いつくのが一番だと思っているので。その人なりの使い方ができればいいと思い



アシードンクラウド／玉井健太郎
2010年秋冬「服育師」より
作家蔵、林雅之撮影

アシードンクラウド／玉井健太郎
2016年春夏「七十二候」の服



に分けるといふのがあるって知って、じゃあ、それで服を作ろうと。七十二候×二色で144着の服を作って展示しました。**K** 服の役割というのは機能性だけにどまりません。新しい価値観やストーリーを生むアイテムになったり、豊かな時間を生み出すものもある。そのために必要な要素を模索して、機能を両立させたらこうなった、あるいはこうならざるを得なかったっていうのが玉井さんの服から読み取れるんです。

T そうですか？ 自分ではあまり気づかないんですが（笑）。確かにイギリスの

ます。

K そこが玉井さんの服作りの特徴ですよ。作り手は服に役割を与えているけれども、それをどう使うかは着る人に委ねている。

T 作る人、着る人がつながっていて、さらにそこから新しいストーリーが生まれるのがいいですね。

K 服の機能や役割の話についてもう一つ。玉井さんは最近「着分ける」ことに注目しているとか。

T 今ってTPOに合わせて服を選ぶことがどんどん少なくなっている気がするんです。例えば、部屋着と寝間着の区別なく、家にいる時はずっと同じジャージを着ているとか。それに対して、今回の乗馬服が作られた時代は、目的や用途、時間ごとに服が作られ、着分けられていた時代だったと思います。そうした「着分け」をすることで気持ち切り替わり、より豊かな時間を過ごせるんじゃないか、服ってそういう機能や役割もあるんじゃないかって思っているんです。

K 最新のコレクション（2016年春夏）では二十四節気・七十二候にちなんだ草木染の服、144点が展示されていました。

T 日本には一年を七十二の細かい季節

T 実は、僕は千葉県の我孫子というところで育ちました。我孫子は柳宗悦が邸宅を構えた町なんです。小学校の時、柳宗悦の活動の痕跡を見つけようっていう授業があったんですけど、その頃は柳がどういふ人なのか、民藝運動って何なのか全然理解できなかった。それがロンドンで勉強して、マーガレット・ハウエルの下で働いて帰国したとき、ふと自分の生まれ故郷を見まわしたら「あ、自分の好きなものはここで生まれてたんだ」って。嬉しくなりましたね。

K 知らず知らずのうちにそういう素地を身に着けていらして、それが服づくりに自然と表われているんでしょうね。

T そうかもしれませんね。**K** 今日はKCIの収蔵品をご覧いただきながら、様々なお話をうかがうことができました。またいつでもKCIにいらしてください。本日はどうもありがとうございます。

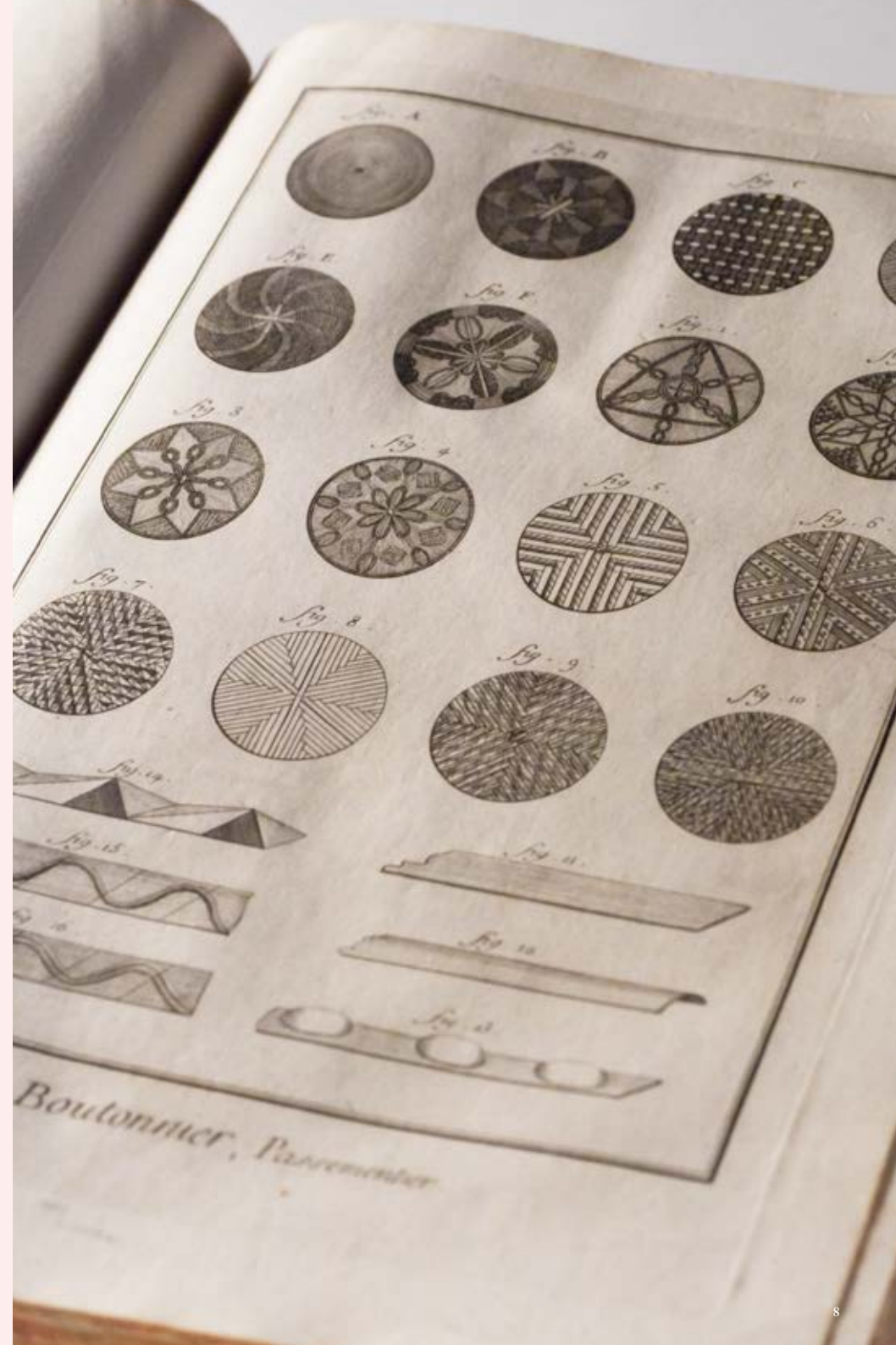
※柳宗悦（やなぎ・むねよし 1889-1961）思想家、宗教哲学者。東京生まれ。古くから生活の中で使われてきた工芸品に「用の美」を見いだし、それらを再評価する「民藝運動」を提唱した。

（聞き手…筒井直子・福岡英城）



1790年頃の男性服 京都服飾文化研究財団所蔵

撮影・成田舞



ディドロ、ダランベール編『百科全書』（1770年代）より「Boutonnier（ボタン職人）」の項 京都服飾文化研究財団所蔵

市原（京都）



ドレスに用いられた紋ビロードの拡大図
(後ろ腰の部分)



シャルル＝フレデリック・ウォルト
レセプション・ドレス 1883年頃
京都服飾文化研究財団所蔵 島山崇撮影

ビロードという言葉に何を思い浮かべるだろう。頬ずりを誘う滑らかなドレス。体が沈みそうな重厚な椅子張の生地。はたまたケイトウの花や蝶の羽の艶めき进行うかもしれない。かつて織田信長がポルトガルの献上品のなから真つ先に手にしたのは、ビロード製の黒い帽子だった。伊達男として知られるオスカー・ワイルドは、衣服のなかでもっとも美しい織物だといって生涯それを愛用し続けた。厚みのある独特の質感と美しさを湛えるビロードは、時代を超え数多の人に愛好されてきた魅惑的な織物だ。

後にオートクチュールの祖と呼ばれるデザイナーのシャルル＝フレデリック・ウォルト「1825―1895」は、19世紀半ばにイギリスからパリへ渡った。最初に勤めた生地店ではリヨン製の高級絹織物などを扱い、そこで織物にまつわる多くの知識を吸収する。当時、絹織物の一大生産地だったリヨンは、パリで作られる高価なドレスの生地の多くを供給していた。数年後、独立したウォルトは自身の服飾店をたちまち上流階級の女性御用達のファッショナブルな店へと発展させる。リヨン製の重厚なビロードを魅力的に使いこなす術を携えて。

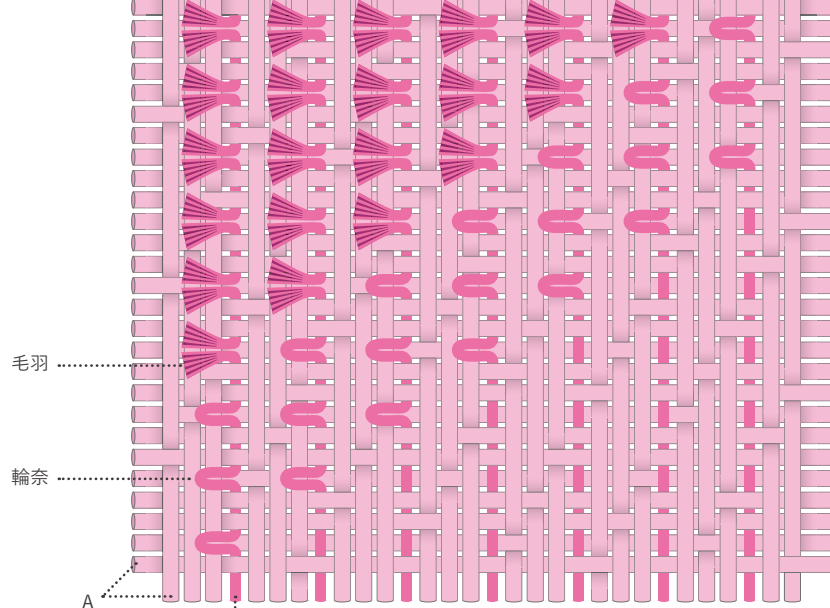
フサフサと起毛したワインレッドの葉とストライプ。それを縁どる細い畝。さらにその周りを埋める絹特有の滑らかな平面。織物の高級感がドレスに優雅な風格を与えている。こうした立体的な織物は西洋ではシズレ・ベルベツト、日本では紋ビロードと呼ばれる珍重されてきた。一体この複雑な織物はどのようにして織り出されるのだろうか。

これとほぼ同じ手法で紋ビロードを織る工房が今も日本各地に数軒残っている。そのひとつ、京都市左京区市原にある株式会社川島織物セルコンを訪ねた。

「ここで織ったビロードは明治ごろに欧米へ輸出されていました。」同社織物文化館学芸員の小柳さんと商品本部技術顧問の徳倉さんがビロード製織の社史を話してくれた。川島織物といえば初代川島甚兵衛が江戸後期に創業し、帯や綴帳、祭礼幕、宮中の室内装飾など、名品を世に送り出してきた歴史ある織物会社だ。明治期には高い織技術と美しい図案が評判を呼び、欧米の博覧会で賞を多数受賞するまでになった。それを足掛かりに織物の輸出を拡大させる。ビロードもその一つだった。

ビロード特有の厚みは毛羽や輪奈から成る。それらを作るために針金を一本ずつ横に通して製織していく。あとで針金上のタテ糸を刃物でカットして毛羽立たせたり、針金を引き抜いて輪奈を作る。文様を表現する場合は、輪奈をカットする部分とカットしない部分の両方を巧みに組み合わせしていく。ウォルトのドレスはさらに複雑な織りで、サテン（朱子織）をベースの組織としながら、そのうえに文様を形作っている。

「日本では江戸前期から京都で織られていたようです。舶載品のなかのビロードに輪奈をつくる針金が残ってい



株式会社川島織物セルコン本社。広大な敷地に工場や織物文化館などがある。

紋ビロードの組織図。基礎となるAはサテン織。Bのタテ糸で毛羽と輪奈を作り、立体的な織物を作る。ビロードは「天鵝絨」とも記され、ポルトガル語の「veludo」に由来。英語ではベルベットと称される。



紋ビロードの帯。土台となるサテン織の上に毛羽と輪奈を組み合わせることで、複雑な文様が形づくられる。



右：製織の様子。タテ糸に引っかからないように細い管の中に針金を入れ、すばやく管を引き抜き針金をタテ糸に通す。その後、通された針金をヨコ糸と共に織り込んでいく。

左上・左下：針金を通して製織された生地を刃物でカットし、針金を引き抜いていく。カットされた部分が毛羽立って厚みを増す。

紋ビロードは光の反射によってその表情を変える。だからたとえ単色であっても織物の装飾性は驚くほど豊かな。19世紀後期はレースやリボンに覆われた装飾過多のドレスが全盛だったが、ウォルトはビロードの特性を最大限に生かすためにあえて装飾を抑えたドレスを多く残している。様々な工程と人々の手を介して織り上げられる表情豊かな織物。彼もまた、この趣きある織物に魅せられた一人だったに違いない。

（取材 文・筒井直子 写真・福嶋英城）

取材にご協力頂いた企業・団体（敬称略）
株式会社川島織物セルコン <http://www.kawashimaseikon.co.jp/>
織物文化館 <http://www.kawashimaseikon.co.jp/bunkakan/>

のを見つけ、その製法が知られるようになったと言われています。」一説にモンゴル帝国から欧州にビロードの製法がもたらされたのは13世紀と伝わる。いったん西側へ渡ったその製法は400年を経てアジアの東端へとたどり着いていたのだ。

「輪奈の切り方は欧州と日本では少し違うんです。欧州では織り進めながらときどき輪奈を切っけいきますが、ここでは針金をすべて織り込んでから最後に輪奈を切ります。実際の作業の様子を見に行きましょう。」

広大な工場を縫うように進み、ビロード製作場の一角に辿り着いた。ガラリとした針金が隙間なく並ぶ。その上に貼りついたような薄茶色の文様。シュツ、シュツと職工の曽根さんが鋭利な刃物で針金の上を横になぞる。するとみるみるうちに文様が濃い茶色へと変わっていく。輪奈を切ることで糸の束が開き、カット面の色が濃く見えるのだ。この工程で最も注意しなければならないのは刃の状態だという。「すぐに刃がダメになるので、頻繁に研がなければなりません。刃が今という状態なのか。音と手の感覚が頼りです。」この作業に携わって4年目という曽根さんの刃物は先輩から大切に受け継がれたものだ。「一筋でも変な切り方をすると段差が出来て表面の光沢が変わりますからね。それひとつで失敗作ということになります。」と徳倉さん。ピンと張った空気のおかげで淡々と作業が続く。

「ちょうど今、製織作業をご覧くださいますよ。」工場をさらに奥へと進むと、カタカタと一定のリズムを刻む大きな織機が現れた。奥行4メートルほどあるだろうか。織巾30cmほどの織物を織り出すための巨大で複雑な装置。それを操る小柄な職工の富田さんは「針金を使うのは普通の織物と違って織り込むときの調子が難しいですね。でも、もう慣れましたよ。」とほほ笑む。針金を通す、ヨコ糸の枠を通す、糸で一部に文様を入れる…。複雑な工程が厳密な秩序で進んでいく。一糸たりとも後戻りが出来ないなかで。

今日の補修室

TODAY'S
RESTORATION
ROOM

第三回

時代マネキン

18世紀 19世紀初期 19世紀中期 20世紀初期 18世紀 19世紀初期 19世紀中期 20世紀初期



正面

側面

KCIには18世紀から最新のファッションまで、約300年にわたる様々な衣装が収蔵されています。

それらの衣装を展示する際に必要なのがマネキンです。しかし、デパートなどでよく目にする現代のマネキンは、古い衣装を着せ付ける際にはほとんど使用することができません。というのも、西洋ではほんの100年くらい前まで、体のプロポーションをコルセットなどを用いて強制的に変えていたため、コルセットを用いない現代人の体型と当時の体型が全く異なるからです。つまり、古い衣装は現代のマネキンには全くフィットしないのです。

そこで古い衣装を着せ付けるための特殊なマネキンが必要となります。KCIでは古い衣装を採寸・計測し、それらのデータから時代ごとのプロポーションを割り出して、特殊なマネキンを製作しました。

それが上図の「時代マネキン」です。バストの位置や形、体の傾斜角度などが時代によって異なっているのが分かります。それらはコルセットなどで体を変形して生み出された各時代の「理想のプロポーション」とも言えるでしょう。これらのマネキンを用いることで、KCIではそれぞれの時代の衣装を無理なく美しく着せ付けることができました。

KCIの生み出したこれらの「時代マネキン」は現在、衣装展示に欠かせない存在として国内外の美術館で活躍しています。(福岡) ☺



補修スタッフ 梅野さん

珍品奇品も数多いKCIの収蔵庫

そこはまさに「驚異の部屋」。



KCI Wunderkammer

紐つきの鉄製網

素材：鉄、綿 製作年：1880年代
原産国：アメリカ

まるで鳥かごか魚籠(びく)に見える網。これもれっきとした19世紀後期のファッション・アイテムだ。ただスカートの下に入れて使うため、表には見えない。1870年代から80年代、後ろ腰を大きく膨らませるシルエットのドレスが流行する。その奇妙な形をいかに奇麗に保つか。そこで考案されたのが、軽くて型崩れしないこの形状。今から見れば珍品に違いないが、当時の人に「理に適っている」と言われれば、傾かざるを得ない。(筒井)



1880年代の下着の着装図
京都服飾文化研究財団
所蔵 成田舞撮影

People

どうしても捨てられない 服飾品は何ですか？

高橋真理

Mari Takahashi



モデル。2003年よりフリーランスとして活動。自身の website にて不定期にエッセイも執筆。

<http://www.maritakahashi.com/>

薄桃色のピロードのドレス、お揃いのボンネット、小さな革靴のセット。とはいえこれらはビスクドールのもの。

このガラスの瞳の少女は、普段散財などしない母がある日突然我が家へ連れ帰り、子供達に小公女セーラのお人形エミリーと同じ名で呼ばれ、ピアノの部屋の椅子にいつもお行儀よく座っていた。数年前実家に取り壊され狭いこの部屋へとやって来た彼女は、思い出のように今は色褪せ綻びた衣装を纏いながら、それでもなお純粹さと心の気高さをいつも忘れないで、とそっと私に語り掛けて来る。

朝倉三枝

Mie Asakura



神戸大学国際文化学研究科准教授。専門は服飾史、ファッション文化論。著書「ソニア・ドローネー 服飾芸術の誕生」（ブリュッケ、2010年）。

着なくなった服はすぐに手放してしまうので、古い服をあまり持っていない。そんな私が一番、長いお付き合いをしているのがトレンチコートであろうか。今年で9年目になる。実は買う時に試着もして確認していたつもりが、サイズが少し大きく、すぐにタンズの肥やしになってしまった。だが、とあるお直し専門店に出会い、自分のサイズに直してもらってから大活躍するようになった。お直しのおかげで愛おしい一着に生まれ変わったトレンチも良い感じにくたびれてきた。最後まで大事に着倒したい。

仲村健太郎

Kentaro Nakamura



グラフィック・デザイナー。展覧会や演劇における広報物のデザインや、美術書、文芸書のブックデザインなどを手がける。 <http://www.nakamurakentaro.com/>

職業柄、いろいろな紙をかばんに詰めてよく運ぶ。見本帳や、色校正、刷り出しや、本などなど。打ち合わせや印刷所に出掛けるたびにかばんを紙でいっぱいにしていく。紙は束になるとずしりと重くって、かばんが痛むのも少し早い。ただどくたつとなったその姿に、一緒にあちこち出かけた時間があるような気がしてなかなか捨てられない。捨てるのは忍びなくて旅行用のかばんに変えてみたりする。その旅先で入った書店で、また本をどっさり買って、かばんに詰めてしまうのだけれど…。

服をめぐる

編集後記

「服をめぐる」衣服の研究現場より 第3号

2016年3月20日発行（年3回発行）

-

発行：公益財団法人 京都服飾文化研究財団（KCI）
〒600-8864 京都府京都市下京区七条御所ノ内南町103

電話：075-321-9221

ウェブサイト：<http://www.kci.or.jp/>

-

編集：筒井直子、福岡英城（京都服飾文化研究財団）

デザイン：坂田佐武郎

写真：成田舞、福岡英城

表紙写真：ドレス「モンドリアン」（イヴ・サンローラン 1965
年秋冬）とペーパードレス（1968年頃）、KCI収蔵庫にて

ここ数年、手芸をする人が増えているといわれます。どっぷりとその世界に入りこみ、凝りに凝る人も多いでしょう。ファッションの歴史を振り返ってみると、工業化が進む19世紀以前は手芸の宝庫です。KCIの収蔵品にも当時の惚れ惚れする美しい手芸の数々を見ることができます。9ページのボタンもそのひとつ。硬貨ほどの大きさに刺繍や彫金の細工が施されたボタンには小さな世界が広がっています。こうした美しいボタンが一堂に会した展覧会「Déboutonner la mode（モードのボタンを外して）」が2015年にパリ装飾芸術美術館で大々的に開催され、KCIは18世紀のドレスなど美しいボタンが付いた4点の衣装を貸出しました。このようにKCIの収蔵品は、国内外の美術館から要請を受け、展覧会に飾られることもしばしば。衣装の展示に出会ったら、それはKCIからやってきたものかもしれません。